

朝鮮人戦時動員に関する研究(2)、手記の検討

西岡 力 (公益財団法人モラロジー研究所教授・
歴史研究室長、麗澤大学客員教授)

はじめに、2つの朝鮮人微用工の手記

本誌前号では統計数字を使って朝鮮人戦時動員について考察した。それに引き続き、微用で動員された労働者の手記を使い、実際の生活に関して述べてみよう。いま、筆者の手元に2つの朝鮮人微用工の手記がある。

1つ目は、1944年12月広島県広島市の東洋工業に微用された鄭忠海氏が、当時、克明に付けていた日記をもとに1970年に自家版として手書きでまとめたものだ。これを井下春子氏が日本語に訳して『朝鮮人微用工の手記』(河合出版、1990年)として日本で出版された。韓国では出版されていない。

もう1つは1945年3月大阪府南河内郡(現在の河内長野市)長野町の吉年(よどし)可鑄鑄鉄工場に微用された金山正捐氏(日本名)が、7月に逃亡し東京の飯場で「自由労働者」として働き、9月に再び長野町に戻り警察の取り調べを受け、調書として書いた手記だ。(註1)

2つとも、当時の朝鮮人微用工の姿をよく示す資料なので少し詳しく引用したい。なお、引用箇所を註で示すと煩雑になるので『朝鮮人微用工の手記』を『手記』とし、『在日朝鮮人関係資料集成 第五巻』を『資料』とし、カッコ内に頁数を記すことで註を省く。

第1章 広島市の東洋工業に微用された鄭忠海氏の手記

鄭忠海氏の手記から紹介しよう。まず、微用者がどのように渡日するのかを見る。

〈一九四四(昭和十九)十一月末ごろであった。

平穏だった私の家庭に一大波紋が起こった。突然、私にも微用令状が来た。あるいはという危惧はあったが、目の前に令状を受け取ると愕然とした。出動の日は十二月八日。日本人の言う大詔奉戴日、ハワイ真珠湾の奇襲攻撃を記念する日である。この度出されたのは第三次微用令状であった。期間は1年。微用令状を受け取れば拒絶することはできない。私も出動準備をせざるを得なかった。勤務していた工場の事務整理や家のことなど、慌ただしい一週間が過ぎた〉(『手記』10頁)

〈十二月八日、その朝はたいへん寒く、零下十九度にも下がっていた。いま日本本土では空襲が始まり、それは焦土作戦だという。それならば我々が行くところはどこになるのか。日本本土のどこの工場か、または炭鉱か。わざわざ爆撃を受けに行くようなものであり、死に場所を求めて行くことになる。私は永登浦にある福本コンクリート工業所に、

一九三九年六月、二十一歳になった年から満五年間勤めてきた。二年前に結婚し平穩に暮らしており、三歳になる長男（東勝）と生後六ヵ月の娘（澄枝）がいる。近くに叔母の一家がいるとはいえ、故郷を離れたところで夫に頼り切って生きてきた妻子が、私をどこか分からない地に送り出した後の暮らしはどうなるのだろうか、と暗澹とした気持ちだった。

生きて再び会える見込みは薄い。別れの時は刻一刻と近づいてくる。古い衣類を詰めたリュックサックを背負い、トランクを持ち、重い足を引きずり、後を振り返りながら別れの言葉もそこそこに、集合場所である永登浦区庁前の広場に向かった。

広場は出発する人、見送る人々で一杯だった。

徴用者の点呼が終わると、一同は隊伍をくんで市内の朝鮮ホテルのそば、商工会議所の前に集まり、各地から動員されてきた人々と共に壮行会が催された。>（『手記』11頁）

ソウルの旅館に一泊し、翌朝、ソウル駅から汽車で出発した。途中、永登浦駅で妻や職場の同僚の見送りを受けた。車内では徴用者らが不安をまぎらわすため騒々しくなった。

<長い汽車の旅を楽しく、日本まで観光旅行でもしてみようという気分になって（略）各人各様に騒ぎだし、ついに乱痴気騒ぎに変わっていった>（『手記』14頁）

<ふつう一日で着くことができる釜山まで、我々が乗っている臨時列車はゆっくりゆっくりと走り、十二月十日午後遅くに釜山駅に到着した>（『手記』15頁）

<[十二月十一日・西岡補以下同] 朝早く釜山港第一埠頭広場に集合をした。整列した徴用者たちは、日本から来た各工場、その他の引受責任者に引き継がれるらしい。こままで我々を引率してきた各区庁労務課職員たちは、無事に彼らに引き継げば責任が終わるのである。>（『手記』15頁）

釜山までの引率は、朝鮮総督府各区庁労務課職員だった。釜山でどこに配置されるかを知らされ、日本からきた各工場などの引率責任者に引き継がれる。米国の空襲が激しいところや危険が多いとされる炭鉱に行きたくない不安が募る。

<これから私はどこかの、何をやるかわからないところに連れて行かれようとしている。ただ北海道の炭鉱にだけは行かないことを願うのみである。噂によると炭鉱では死傷者が沢山出ているという。今のこのときが、私の生死の岐れ道になる重大な時なのだ。>

すでに日本本土ではアメリカ機の襲来が始まっていて、首都東京も空襲を受けている状態だという。我々は日本本土にアメリカ機の攻撃に遭いに行くのか、そうでなければ危険な炭鉱に行くのか、いずれにせよ運命に身を任す息づまる時が刻一刻近づいてきている。

まもなく各会社別に引き受け、引き継ぎが終わった。永登浦出身の我々は「ひろしま（広島）」にある東洋工業株式会社に割り当てられた。何の仕事をしている会社かはわからないが、工場であることは間違いないようだ。一番恐れていた炭鉱でないのでまずはほっとする。>（15～16頁）

<我々永登浦出身者一同は「東洋工業」と書いた旗のもとに集まり整列した。東洋工業

の引率者は、背が少し高い五十歳前後の人で、`野口、といった。私は野口氏によって広島
島の会社までの統率者に選ばれた。即ち中隊長の役目をする。

この度東洋工業に行くのは、ソウル各区から動員されてきた二〇〇名だ。〉(『手記』16
頁)

〈十二月十一日午前八時ごろ、我々一同は埠頭に待機していた連絡船に乗船しはじめ
た。連絡船「金剛丸」は実に巨大な船だった。(略)

船に乗ると人々は先を争って上甲板に上がった。この次、この釜山の港を見れるのは何
時か、もしかしたら永遠に帰れない身になるかも知れない。最後の故郷の山河、目の前に
広がる釜山の港をじっと見つめて、ある者は涙を流し、ある者は腕がちぎれんばかりにハ
ンカチを振りながら、「元気でいろよ、釜山の港よ。もう一度見たい故郷。また帰ってこ
るまで、変わらない姿でいてくれ」と叫び続けた。

このとき、涙を流さなかった朝鮮人は一人もいなかっただろう。それこそ断腸の思いで
の別れであった。

我が祖国、我が民族の為に、闘いに行く、働きに行くのなら、諦めもできよう。だがよ
その国家と民族のために強制的に動員されていく身の上、弱小民族の悲哀。船上には冷
たい雨さえしとしとと降り始め、それだけでなくも侘しい流浪の心をより乱した。〉[下線西
岡、以下同] (『手記』17頁)

昭和19(1944)年9月から「徴用令」が朝鮮でも施行された。ちなみに「徴兵」実施は
同年1月からだ。

以上から分かるように、徴用という強制力の伴う動員がかかった場合、「徴用令状を受
け取れば拒絶することはできない」という強制性へのあきらめの意識があった。一方、空
襲の激しい内地に行くことへの不安や、17頁下線部分によく表れているように、この戦
争は日本民族のためのものであって自分たち朝鮮民族のためのものではないという意識
もあって、できることなら行きたくないという内心の思いはあった。

ただし、当時の朝鮮人たちが持っていた戦争に対する思いは、かなりの幅があった。鄭
氏の手記の中にも、海外で展開されている朝鮮独立運動に共感していた同僚徴用工が出
てくる。一緒に東洋工業に徴用された京城市鐘路出身の張某氏らに関する次のような記
述だ。

〈当時、ここに来ていた我が同胞たちの中には、太極旗を知らない者もいた。しかし何
人かは太極旗はもちろん、遠くアメリカでは李承晩博士が、そして中国重慶では金九先生
たち愛国・憂国の志士たちが、大韓独立のため以前から心血を注いで、日帝と独立闘争を
していたのを知っていて、多くの同志たちに暗々裡に口伝えされ、この第二寄宿舎に
いる人たちはほとんどみんな知るようになっていた。八月六日原爆投下以後、極秘に太極旗
を作って(日章旗を変造)深く隠している者もいた。

第一中隊第三小隊の張某(鐘路出身)と言う者がいた。(略)彼は広島にきた後も工場
に出たことがなかった。いつも病氣だと称して宿舎にこもっており、舎監たちから憎しみ
を受けてきた。この人こそ当時言われていた思想家だったらしい。張某氏は当時としては
珍しい短波ラジオをもっていて、極秘に米国放送を聞いては時々重大なニュースをこっ

そり我々に伝えてくれていた。〉(『手記』154～155頁)

徴用で動員されていても病氣だと称すれば工場に1日も出ないことも許されたこと、またそのような問題人物が短波ラジオを隠れ聞いていたが摘発されなかったことなどから、当時の徴用者への監視、統制が想像をこえて緩かったことが分かる。

一方、別の証言集(註2)に登場する朝鮮人、権熙憲氏は当時徴用を「天皇陛下の赤子として名誉であり国民の義務」だと考えていたと、以下のように回想している。権氏は1944年11月、徴用工として樺太に動員されている。

〈私の「徴用」の時は、大邱の府行から出頭命令が文書で来て、身体検査のために、大邱の公会堂に300人集まりました。1944年11月の初めでした。その中から115人を残して、他は帰らせました。

ところが、11月12日の出発日になったら、115人のうち85人しかいませんでした。後は、皆逃げてしまったのです。

その頃の私は、「徴用」で行く事は「天皇陛下の赤子として名誉であり国民の義務」なので、仕方ないと思っていました(略)

「徴用」は国家の名において行われるのだから、約束通り2年間で帰れると思っていました。〉

◆徴用者を迎えるのに神経を使った会社

鄭氏の手記に戻り、広島での徴用者らの生活環境について見てみよう。まず住居だ。

〈海岸に新しい木造二階建ての建物があつた。そこがこれから我々が寝起きする寄宿舍で、朝鮮応徴士たちを迎えるために新しく建てられた第二寄宿舍だという。新しい建物なので少し安心する。

割り当てられた部屋に入った我々は、先ず旅装をといた。私は二階の部屋であつた。室内を見回すと、たたみ(畳)、二十枚を敷いた広い部屋に、新しく作った絹のような清潔な寝具が十人分、きちんと整頓されており、片方には布団と私物をいれるのだろう、押し入れが上下二段になっている(約十坪の部屋)。横になっていた誰かが、

「これなら結婚の支度はまずまずだが、新郎(仕事のこと)がどんなかわからなければ、はっはっは」

と笑つた。

衣・食・住の三つの問題のなかで、住についてはまずまずだ。〉(『手記』21～22頁)

〈二十畳ばかりの畳の部屋で十人、一人にやや厚い敷布団に掛け布団が二枚ずつ、絹のような寝具で、我々のために新しく作つたらしい。これなら畳の部屋でも寒くなく過ごせそうだ。会社側では、我々朝鮮半島出身応徴士を迎えるに当たり、いろいろ神経を使ったようだ。当然のことだ。他人の家の大事な息子であり、愛する夫、父親ではないか。そんな大事な人間を徴用で連れてきて仕事をさせようというのだから〉(『手記』26～27頁)

新しい寄宿舍で1人当たり2畳の広さの大部屋、新しい寝具が準備されていた。「まず

まず」どころか戦時中にしてはかなり恵まれた住環境と言えよう。

食生活はどうだったか。

〈明るい食堂には、大きい食卓が並んでいた。新しく作られたものらしい。食堂のホールの前の厨房では年ごろの娘さんたちが、白いエプロンをつけて食事の準備に忙しそうだ。

食卓の前に座っていると、やがて各自の前に食事が配られた。飯とおかずの二つの器だ。飯とおかずは思いのほか十分で、口に合うものだった。(略)

とにかく食べることに眠ることは安心してよいだろう。腹が減っていたところに、暖かいおいしい飯を腹一杯食べたので生きかえたようだ。〉(『手記』23頁)

〈飯は大豆が混ざった米の飯で、おかずは筍と肉の煮物で、口に合っていて食べられた(あとで分かったことだが、肉は馬の肉だという)。戦時中日本では、馬の肉を喜んで食べたという。食事の分量も私には適当だった。いつもこうした待遇なら別に不満はないだろう。〉(『手記』27～28頁)

食生活も1944年12月から翌45年夏までという食糧難のなか、かなりの好待遇だったと言えよう。

また、月給は140円いう高給であり、食堂の食事以外にかなりの食糧を近隣に出かけていって調達している。ちなみに当時の巡査の初任給は45円、上等兵以下の兵士の平均俸給は月10円弱だった。夕食後は宴会を開いたという。バクチをやる者も出てくる。

〈みんなが集まって生活してみると、いろんな人がいる。ある人は「みかん、や「ネーブル、を、またある人は「なまこ、や「あわび、など、さらに酒まで求めて来て夕食後に宴会を開く。これらはここに来ている人たちの愉しみであり、唯一の慰めでもあった。(略)

ソウルではみかんのようなものは、わずかな配給のほかには求めることさえできない。そんな貴重なみかんが、ここではみかん畠に行けばいくらでも買うことができる。下痢をするほど思い切り食べてみたものだと言いつつ。それに向洋〔寄宿舎のあった場所・西岡補〕と川1つ隔てた淵崎は、漁村で牡蠣の名産地だという。このあたりには牡蠣の養殖場が多いためか、そこそこの牡蠣の殻がうず高く積まれていた。時々食堂でだしてくれる牡蠣が入った飯(牡蠣飯)は本当に珍味だった。

干潮になると、食堂の後ろの浜辺ではなまこや浅蜷(貝)をたくさんとることができた。人手が足りなくて取らないのか、なまこや貝などがそこらじゅうに散らばっている。日課後にそんなものを採るのも面白かったが、それを煮たり焼いたりして酒盛りをするのは格別だった。食料品は何もかも不足していたが、ここではいろんなものを食べることができた〉(『手記』31～32頁)

〈どこに何があり、どこに誰が住んでいるのかわかっており、どんなものでも求めてきて煮たり焼いたりして、酒盛りやみかんパーティ等がいつも繰り広げられていた。戦争中で、決してお目にかかることが出来ない物でも、寄宿舎の中では珍しくはなかった。彼らはどこかに行って求めてくる。また多くの人が集まるところでかかせないのが、賭けごとだ。こちらの隅、あちらの隅で、花札の六百やソツタがやられる。一カ月、二カ月にあた

る給料を、みんなすったとこぼす者も少なくなかった。〉(『手記』110頁)

鄭氏は1945年3月、微用者のリーダー5人とともに奈良にある西部勤労訓練所で1カ月の教育を受けたが、そこの食糧事情は極度に悪く、栄養失調になって広島に帰ってきた。同行した日本人社員1名も同じ教育を受け、やはり栄養失調になっているから、朝鮮人微用者だけがひどい待遇を受けたとは言えない。

◆若い女工らに囲まれた楽しい工場生活

次に工場での作業について見ておこう。

東洋工業に到着してから1カ月間は練兵場で訓練を受けた。その後、1月13日入社式を済ませた。

鄭氏は99式小銃の一付属部品の「遊底子」を作る第十工場に配属された。

〈工場に入ると先に出勤している女工たち〔女子挺身隊として全国から勤労働員された日本人未婚女性ら・西岡補〕が、走ってきて挨拶をする。たいへん親切に接してくれるのだった。中でも私を教えてくれる技工格の村上さんは、気持ちよく接してくれた。仕方なく工場に出勤して来たのだが、それほど気分は悪くなかった。(略)

付属品を削って、ゲージに合わせてみると、十中八、九は不合格品だ。しかし村上さんは一生懸命教えてくれる。彼女の顔にはいつも微笑がたえない。〉(『手記』48～49頁)

朝鮮人微用者は女子挺身隊の若い日本人女性が多い職場で、「退屈しなかった」という。

〈我々は女工の間で作業するので、退屈することはなかった〉(『手記』50頁)

〈工場で働く男たちは武器生産には心がなく、女性たちとの恋だ愛だということにばかり心をうばわれているようで、工場内の風紀は言葉にならないほどだった。どの工場だったか、プレスを操作していた白某ベッという者が、作業中女性とおしゃべりをしていて、自分の親指をぱさぱさ切り落としたことがあった。その白という友人は、恋のために親指を切り落とした最初の犠牲者になった〉(『手記』108頁)

厳しいノルマなどはなく、それなりに楽しい作業環境と寄宿舍生活だったことがよく分かる。

◆戦争未亡人との逢い引き

鄭氏は第二寄宿舍の職員である二十代前半の日本人戦争未亡人の岡田さんから熱烈に慕われ愛人関係となる。そのいきさつを同書の中でわざわざ「岡田さんのこと」という項目を1つ立てて、次のように回想している。自己美化も入っているだろうが、当時の微用労働者の日常を知る良き資料だと考え、さわりをそのまま引用しておく。

〈ある日、退勤後に同郷の金在文キムヂェムン氏が部屋を訪ねてきた。(略)

金さんは「本当に我々の頭上に爆弾が落ちてくる日も遠くないようですね、実はそれ

で鄭兄に申しあげることがあってきたのです」と、少し言いにくそうにしながら、「今日は鄭兄の仲人をしようと思って訪ねてきたのです」と笑った。私があっけにとられて「何の冗談ですか」と言うと、彼は笑いながら、「鄭兄、なぜとぼけておられるのですか」と言って、「でははっきり話しましょう。鄭兄と岡田さんの仲人をするのです」と笑うのだった。私もつい笑った。「私は妻子がいる男ではないですか。きっと岡田さんが金さんに何かを話したのでしょうか、とにかく聞きましょう」と言うと、金在文氏は真顔で次のような話をするのだった。

「岡田さんは私と鄭兄が同郷で親しい間柄であることを知って私を訪ねてきて、自分のことを必ずあなたに話してくれと頼んだのです。岡田さんは私に、智山さん〔鄭氏の創氏改名後の名字・西岡補〕を好きになりました。でも、一方的な片思いをしているようです。これまで暇さえあればあの方を訪ねて行って話をし、無言のうちに気持ちを伝えたのですが、今日まで何の反応もありません。皆さんがここへ来られてもう七カ月がたちました。私は半年以上も片思いをしていることになります。もちろん彼は妻子がおられる方です。でも、若い男性が、それも異郷の地で、一時間先の生死の運命さえわからない戦時中のことです。(略) 最近になって気が気でなくなり堪えられなくなりました。特に呉の空襲のあとではなおさらです。居ても立ってもおられません。金さん、大変厚かましいお願いですが、どうぞ助けてください。彼も私の気持ちを知らないのではなく、ただ世間体を考えて近づくことができないようです」と。

「この宿舎の中の有様を知っていますか。岡田さんに目をつけている者がどれだけいるか知れません。もちろん鄭兄の気持ちもわからないわけではありません。しかし聖賢も風俗には従うと言うではありませんか。まして今は戦時です。ここは日本ではありませんか。何をそんなに躊躇しているのですか。呉の空襲を見たでしょう。無慈悲なあの爆撃、ここもまもなく受けるのではありませんか。我々の生死も時間の問題ではないかと思えます。必ず生きるという保証もないということです。鄭兄、なぜそんなに小心のですか。男が他国に連れてこられて人の道にはずれたとって、何の大きな罪になりますか。死ぬ前に他人の願いをかなえ、残った余生を楽しみ、生死を待ちましょう」

金在文氏の言うことにも一理がある。我々はすでに死者の仲間入りをしている状況である。現実の中で生きて行こう。

彼は仲人役がうまくいったと喜び、「岡田さんに伝えてくる」と出て行った。少しして戻ってきて、彼女に伝えたところ、喜んで、「今晚九時ごろに食堂の後ろの海岸の塀の角で会おう」と言う伝言であった。金在文氏は、「鄭兄、岡田さんとお楽しみください」と笑いながら行った。(略)

彼女の家は寄宿舎の前の社宅であった。家の中には誰もいなかった。(略)「遅くなったけれどもお上がりください」と私を居間に案内した。上がると彼女は風呂を勧める。面倒だとは思ったが入浴していると、彼女が来て背中を流してくれた。これが日本式らしい。風呂から上がると、日本の浴衣に着替えるとすすめる。居間には、いつのまにか食事の用意ができていた。(略)

夏の夜は短い。明け方五時になった。彼女は私を起こして「早く寄宿舎にお帰りなさい」とせかす。宿舎に帰ると、小隊長たちが広い部屋で寝入っていた。戸を開ける音で目を覚ました第三小隊長の柳光勲^{ユクカンフン}が目をあけて「何処へ行ってきたのか」、「今帰ってきた

のか」と聞く。私は曖昧な返事をして布団にもぐりこんだ。彼はそれ以上咎めなかった。起床時間にはまだ時間があり、私は布団に入るやいなや直ぐに眠ってしまった。〉(『手記』117～122頁)

徴用された朝鮮人労働者が夜、自由に寄宿舎を抜け出して逢い引きすることができた。その気になればいつでも徴用現場を抜け出して「自由労働者」になれたということだ。鄭氏の月給は140円だったし、衣食住の待遇も良かった。工場側は朝鮮人労働者らに大変な神経を使っていたことが分かる。それくらいしないと、せっかく徴用で確保した労働力も、より条件のよい内地の他の職場に逃げられてしまうという現実が背景にあったことだ。

その後、鄭氏は岡田さんの働きかけもあり事務所勤務となったため、原爆投下の日、市内での勤労働員に出ず、命拾いをする。

第2章 大阪府南河内郡可鑛鑄鉄工場に徴用された金山正捐氏の手記

◆逃亡して東京で朝鮮人の親方の飯場へ

次に金山正捐氏の手記を見ておこう。前述の通り、1945年3月に大阪府南河内郡長野町の吉年可鑛鑄鉄工場に徴用された金山正捐氏が、7月に逃亡し東京の飯場で「自由労働者」として働き、9月に再び長野町に戻り警察の取り調べを受け、そこで書いた手記だ。

徴用先からの逃亡の経緯を見る。

〈私ハ朝鮮デモ可成ノ裕福ナ家庭ニ生立チマシタノデ最初ノ内ハ逃出ストイフ気持ハ毫モアリマセンデシタガ、漸次故郷懐シク加之毎日集団ノ隊長神農大律ト口論シ果テハ喧嘩ノ未殴リ合モ五六回ニ及ビ、ソレニ隊長ノ方ニハ良カレ悪カレ会社ノ幹部モ応援スルノデ居堪ラナクナリ(略)私ト崔安石トガ逃ゲルコトニ決心シテ申シ合セテ、二人デ[1945年・西岡補]七月二十八日昼飯後寮ヲ脱ケテ大鉄長野駅ヨリ阿倍野橋ニ出タ処空襲ニ逢ヒ城東線京橋デ下車シ京阪電車デ京都ニ着キマシタ

私ハ所持金ガ二百五十円程アリマシタノデ宿屋ニ泊リ食事ナシデ部屋代十二円ヲ支払ヒマシタ〉(『資料』50頁)

逃亡の動機は作業の厳しさや待遇の悪さではない。隊長である神農大律との喧嘩が原因だった。なお隊長は徴用者の中から選ばれるから、神農大律は朝鮮人の創氏改名した名前だ。手記によると、神農大律隊長も「数日中に逃げるらしいとの噂」があったという。

なお、前出の広島に徴用された鄭忠海氏は、100人の隊員がいる中隊長に選出されている。中隊の下に3個の小隊があり、その1個小隊は3個分隊に編成されており、各々小隊長、分隊長が選出されていた。神農大律隊長が分隊長、小隊長、中隊長のいずれであったかは分からない。

金山正捐氏は1945年3月に同工場に受け入れられ、逃げたのが7月28日だから、約5カ月徴用工として働いたことになる。その結果、250円程の現金を持っていた。金山正捐氏

の月給がいくらだったかはこの手記には記載されていないが、前出の鄭氏の月給が140円だったから、それと同程度はもらっていたのだろう。

なお、1945年3月、同工場は金山正捐氏を含めて41人の朝鮮人微用工を受け入れているが、そのうち15人が逃走していると、長野町警察署長は同年9月18日付のこの資料に書いている。

終戦後、微用工には行動の自由が与えられたから、ここでいう「逃走」とは8月14日までのことだ。3月の何日に彼らが工場に着いたかは不明だが、3月はじめだとしても8月14日までは5カ月半だ。その間に41人中15人、37%が逃走している。その気になれば、かなり自由に微用現場から抜け出せたことがここでも分かる。

長野駅から阿倍野橋駅、京橋駅を経て京都駅までは問題なく鉄道で移動できた。京都から東京への切符を入手することには少し手間取った。鉄道員に証明書がないとだめだと言われるが、それでも頼み、1枚70円のヤミ切符を2枚売ってもらう。7月29日夜、京都駅を出発し、名古屋から中央線回りで列車を乗り継ぎながら東京に向かい、31日午後2時頃、立川駅で下車した。

〈改札口ヲ出ルト一人ノ朝鮮人ニ逢ツタノデ此辺ニ飯場ハナイカト尋ネルト其人ハ全南海南郡ノ生レデ金海トイフ人デ(略)西多摩郡ノ小河内村ノ飯場ヘ行ケト教ヘテクレタ其飯場ヘ行クト親方ハ慶南生レノ新井トイフ人デアツタガ、コノ人ニハ、私達ハ罹災者デ空襲ヲ逃ゲテ来マシタ宜敷頼ムト云ツタ処心カラ引受ケテクレタノミデナク、直グニタ食ヲ戴イタ、余リ腹ガ減ツテイタノデ餓鬼ノ様ニ喰ベテウマイトモ何トモ感ジマセンデシタ
飯ヲ食ウト煙草「光」五個宛呉レタガ、ソノ飯場ハ皆デ八名デ翌八月一日ハ疲レテイタノデ飯場ヲ休ンデイル処ヘ昼頃、新井ノ親方ガ濁酒ヲモツテ来テ呉レテ幾何デモ飲メト云ツテ呉レマシタノデ有難クテタマラズ飲ミマシタ〉(『資料』51頁)

すぐに朝鮮人親方の飯場が見つかり飯場で世話になる。働く前から夕食や煙草、どぶろくまで出るという好待遇だった。いかに労働者が不足していたのかが分かる。

立川駅前小河内村(現在の奥多摩町)の飯場を紹介してくれた金海という人物は、朝鮮人の親方の飯場を回り、地下足袋やシャツ、鉄道切符などを売り歩く闇商人だった。地下足袋1足250円、シャツ70円から100円、東京から朝鮮までの切符500円という、かなり高値で商売していた。このような高値でも、朝鮮人労働者は高賃金をもらっていたので十分商売になった。ここからも当時の朝鮮人労働者が受けていた好待遇が分かる。

◆高賃金、軽労働の飯場生活

飯場での作業の様子を見てみよう。

〈八月二日現場へ出カケタ処其途中デ現場ノ一人ガオ前達二人ハコッチヘ来イトイフテ山ノ奥ヘ連レテ行カレタ、ソコニハ大キナ横穴ガ掘ツテアリ、ソノ近クニ板ガ沢山アツタノデ、ソレヲ下迄運搬セヨト云ワレ十一時頃迄二運ビ終ワツテ、川ヘ行ツテ水浴シテ帰ツテ午後ハ遊ビマシタガ、コレダケノ仕事ヲシテ一日十五円ノ給料ヲ貰ヒマシタ

八月三日飯場ヨリ一里位離レタ現場ヘ又行ツタガ大キナトンネルガアツテ陸軍ノ歩哨ガ立ツテ居タ、ソナトンネルヲ四ツ潜ツタ処ニ同ジクトンネルノ中デ飛行機ヲ製作シテ居リ、其処デモ運搬ヲ少シ手伝ツテ十五円ニナリマシタ〉(『資料』51頁)

朝から11時までの半日の作業で15円だから、いかに好待遇だったかが分かる。また翌8月4日は仕事を休み、東京見物に出かけている。自由なものだ。そして横浜を回り、府中近くの高幡山で朝鮮人の飯場を見つけ、5日に小河内村の飯場を辞めて移る。仕事は防空壕掘りだった。ここでも親方から煙草6個をもらう。

〈八月七日現場デ測量ノ手伝ヲシタガ仕事ハ楽デ、一日二十円ノ貸金ヲ貰ヒマシタ〉(『資料』52頁)

〈八月九・十・十一日ト三日間毎日現場デ朝九時カラ午後二時カ三時頃迄防空壕掘ノ天井ノ板ヲサス仕事ヲ続ケマシタ〉(『資料』52頁)

ここでの作業もかなり軽く、小河内よりも5円高い日当20円という高賃金である(註3)。高幡山の飯場での食事については、次のように書いている。

〈コノ飯場ハ半島人労働者ガ三百人位シカイマセンデシタガ幽霊人口千五百人位ヲ喰ラヘテオリソレデ配給モ大変豊カデ腹一杯食ワシテ呉レマシタガ食事ハ豆計リデ米ハ殆ンドアリマセンデシタ、ソレハ配給ノ米ヲ皆横流シニシテ金ヲ儲ケテイル訳デ其処ノ半島炊事係ハ二カ月デ十万円モ儲ケルトノ事ヲ聞キ驚キマシタ
コノ外ニ五日ニ一回位平均デ牛ヲ密殺シマスガコノ牛ハ一頭二千五百円デ買ツテソノ肉ヲ飯場ノ者ニ売リツケ金ノナイモノハ食ベナイガヨイ給料ヲ貰ツテイルノデ金ハアリ聞デドンドン買フノデー頭デウント儲ケルトノ事デ皮ダケデモ一千円デ売レルトノコトデシタ〉(『資料』52頁)

前の飯場では濁り酒があり、ここでは5日に1回牛を密殺して食べていた。また、300人しかいないのに5倍の1500人分の米の配給を受けて、それを横流しして儲けていた。これは戦後の闇市での話でなく、戦時中のことだ。

文字どおり命懸けで総力戦を戦っていた日本人にくらべて、いくら内鮮一体を強調しても、多くの朝鮮人にとってはあの戦争は日本人の戦争であって、自分たちが命を懸けて取り組むという認識は一部を除いてなかったということだろう。

そのことを分かっていたから、日本政府も朝鮮人に徴兵、徴用をかけるのは1944年という土壇場だったのだ。忠誠心のない者を戦場に動員しても、いつ裏切るかも知れないという意識があったからだ。

当初、軍部は朝鮮に徴兵制度を導入するのは1960年頃がふさわしいという考えを持っていた。そのころになれば日本国に忠誠心を持つ者が多数を占めるだろう、という理由などからだ。(註4)

しかし、徴用現場における日本人と徴用労働者との問の人間関係は概して良好だった。先に見た鄭忠海氏は、現場に勤務していた日本人戦争未亡人に熱愛されている。また金

山正捐氏も、

〈吉年工場ノ寮デ親切ニシテ下サツタ寮長ノ事ヲ思ヒ金谷〔先に逃げた同僚徴用者・西岡補〕ト二人デ御詫ニ寄セテ貰フト話が決り九月九日再ビ元ノ七生寮ニ帰ツタ訳デス〉（『資料』53頁）と手記を結んでいる。

終戦後、東京から朝鮮に帰る途中にわざわざ大阪に寄り、徴用された工場の日本人寮長にあいさつに来たのだ。それくらいその「親切」が身にしみていたということだ。

結論 実態を知らずに日本を批判する韓国の若者

ここで引用した2つの手記は、1980年代末頃から、日本人らによって火をつけられて始まった、いわゆる戦後補償要求が出てくる前に書かれたものであり、要求の正当性を強調するという政治的意図が加わっていないという点で、史料価値が高い。

特に鄭忠海氏の手記は自身が同書「はじめに」で書いているように、「一老人となり、自分の青春の痛烈な記録を残したいと考えるようになった。（略）当時の朝鮮人徴用工の事実を少しでも知っていただけると嬉しい」（『手記』8頁）という動機で書かれており、記憶違いなどはあったにしても、事実をゆがめることはなかったと考えてよい。

しかし「訳者あとがき」によると、韓国でこの手記は鄭氏本人が「ここで〔韓国での意味・西岡補〕誰が気にとめてくれますか」と語ったように、まったく韓国人の関心の対象になっていない。前述の通り手記はもともと手書きのもので、日本語訳だけが出版された。

若い韓国人はテレビや新聞、また学校教育で虚構である強制連行に代表されるような虚構の多いステレオタイプの日本統治時代史を学ぶ。実際その時代に日本人と朝鮮人がどのような関係にあったのかということなどはほとんど無視されている。あれだけ日本統治時代が取り上げられながら、その時代に生きていなかった世代はほとんどその実態を知らないままである。

いわゆる「反日日本人」は、実態を知らないでやみくもに日本批判を展開する韓国の主張を根拠として日本批判を展開している。歴史をゆがめ、日韓の真の友好を妨げている元凶と言うべきだ。

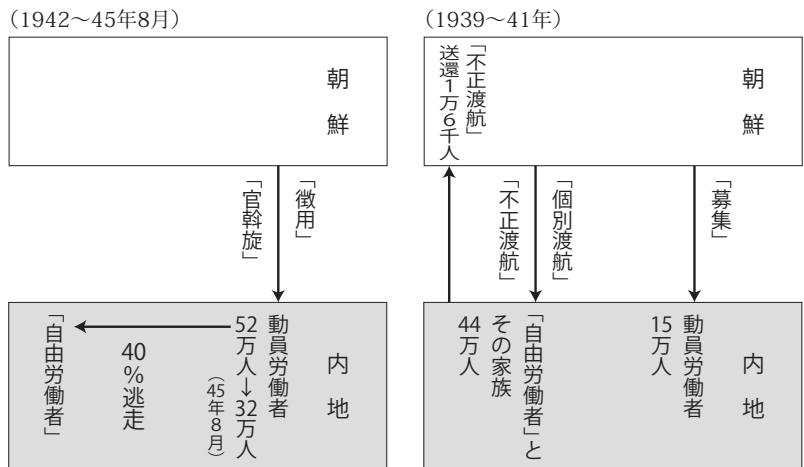
徴用工の手記の検討により次の点が明らかになった。

徴用の時期、受け入れ工場では乏しい物資の中、できる限りよい衣食住環境を準備した。日本人は戦争を自分たちのものと意識していた。朝鮮人はそのような当事者意識は希薄だった。平和な農村からいやがる青年を無理やり連れて行って、奴隷のように酷使したという「強制連行」イメージは二重の意味で事実ではない。第一に朝鮮人労働者は内地で働きたがっていた。無理やり連行したのではない。第二に、彼らの多くは日本政府の戦争遂行のための統制に従わず勝手に就労した。事実と反する「強制連行」「奴隷労働」プロパガンダは1970年代以降、まず日本で作られ、それが韓国にも広がった。先入観を排した実証研究が求められている。

- 註1 昭和20年9月18日付で長野町警察署から大阪審察局長・治安部長・特高第二課長宛に出された「逃亡セル集団移入半島微用工員ノ諸行動二関スル件」と題する公文書の中にあり、朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成第五巻』三一書房、1976年、50～53頁に収録されている。
- 註2 伊藤孝司『写真記録 樺太棄民 残された韓国・朝鮮人の証言』ほるぷ出版、1991年、34頁
- 註3 金山正捐の同僚微用工で金山より数日早く逃亡した金谷文殊は、京都府宮津の朝鮮人の飯場で働いたが、20日余りで350円もらっている。驚くほどの高賃金だったことが分る。『資料』53～54頁に金谷の手記が収録されている。
- 註4 1937年11月24日付の朝鮮軍参謀から陸軍次官宛の機密文書。詳しくは宮田節子著『朝鮮民衆と「皇民化」政策』未来社、1985年。

前号西岡論文74頁の図1の訂正

図1 戦時動員の概念図



(西岡 力作成)